

# 沖縄とギリシャの「土」をめぐる風土の研究

赤嶺 和江

キーワード: 沖縄, ギリシャ, 風成塵, 冬作農業, 居住区・非居住区, 母系社会

## 龍蛇信仰

### 1. はじめに

#### (1) 『風土論』をめぐる考察 (和辻, オグユスタンベルグ, 安田の風土論からの視点)

沖縄の気候は亜熱帯性気候で年中温暖であるが、夏は高温で雨量が比較的少なく、旱魃や台風による作物の被害を受けやすい。夏に襲来する台風は沖縄に潤いをもたらしてくれるが、雨の降り方は集中的である。しかし冬は温暖湿潤な気候である。いっぽう、地中海気候に属するギリシャも夏は高温で極度に乾燥するが、冬は温暖で湿潤である。このため、両地域とも古くから温暖湿潤な冬に耕作する冬作農業に依存してきた。

農業の基盤をなす土は、ギリシャ・沖縄とも後述するように砂漠から運ばれてきた風成塵を母材としており、白い石灰岩の上には赤黄色土、テラロッサと呼ばれる赤い土が堆積している。サハラ砂漠と中国内陸砂漠から運ばれてきた風成塵が堆積してできた赤い土壌にはカルシウム分などが多く含まれ、柔らかく肥沃な土壌を形成している。しかし、両地域とも季節によって極度に乾燥し、土壌中に深い亀裂ができる。そこに集中的なシャワーと呼ばれる雨が降るので、土壌が流失しやすい欠点を有している。したがって肥沃な土壌を保全するために古くから「土」の管理には十分な配慮がなされてきた。

沖縄は台風銀座といわれ、長雨が続きたり、ときに日照りで農作物が全滅することもあり、農作物が収穫できるのは天の配剤であるといわれる。また、沖縄は島が小さいこともあり、土には恵まれないところが多い。石ころだらけの石灰岩地帯が広く、その土壌は貧弱である。そのため農産物にも決して恵まれることが少なく、しかも干ばつや台風などの気象災害を受けやすく、豊かな島にはなりえなかったのが沖縄である。そのため、大切な「土」を守るために様々な工夫がなされてきた。薄い表土を流亡させないために傾斜地では段々畑を作り、地味のない土にはウニなどを海から採ってきては畑に入れて、カルシウム分を増やすなどの努力が戦前まで各地で行なわれた。

そういったことが沖縄人の気質に影響を与えているとすると、「土」の管理に対して勤勉であっただろうし、天候やもろもろの自然現象などのように、自分の意思ではどうしようもできないものに対する寛大さと自然に対する畏怖の念を培っていったのではないかと考えられる。

沖縄の人々の生活と気質について、ベイジル・ホール著『朝鮮・琉球航海記』によると (イギリス軍艦艦長ベイジル・ホールは 1797 年に琉球を訪れ、住民との交流や風俗描写をしている)、彼は、那覇港に数日しか滞在しなかったが、初めて対面した琉球人の印象について次のように述べている。「われわれは、これほど好意的な人々に出会ったことはかつてない」、「その態度はおだやかで、礼儀正しく、話しかけるとときにはお辞儀をした」、「こ

の人々の態度はきわめて温和で、ひかえめであった。注意深く、好奇心がないわけではないが、われわれが繰り返してすすめたあとでなければ、決して近づいてみようとはしなかった。好奇心にかられて我を忘れるような行動はしない、という上品な自己抑制を身につけているためと思われる。その立ち振る舞いも、もっとも身分の低い者たちでさえ、上品で節度がある」といわしめた。沖縄が昔から守礼の国として、他の大国の交渉の中で国を守ってきた気質を生んだということにも、風土の影響があるのではないだろうか。

また、ベイジル・ホールは当時の琉球の人々の耕作法について、「彼らの耕作法は中国に似て手が込んでいる。特に施肥と灌漑の技術においてそうである。砂糖キビの耕作には、念入りにこの二つの技術が施されている。彼らはこのほかに煙草、小麦、米、玉蜀黍、粟、甘藷、茄子、その他各種の野菜をつくる。耕地はきちんと四角く整えられ、周囲には土を盛って畦を作り、人はその上を歩くようになっている」と記している。

当時の琉球の農民が念入りに土を耕し、作物を育てていることが読み取れる。

## (2) 海洋民俗としての琉球人とギリシャ人

かつてギリシャの繁栄は豊かな森によって得られたものであったと言われている。しかし、その文明の崩壊は豊かな森を食いつぶした結果引き起こされたものであるといわれている。和辻によると、ギリシャの従順な自然の中で平和な農牧生活を営むことのできたはずのギリシャ民族が何故に海へのりだし、小アジアの海岸にまで移らなければならなかったのか、その原因として人口の増加とギリシャの土地が豊饒でないことをあげている。ギリシャは「ポリス」が創られた時に「ギリシャ」もまた始まったと言われる。それは農牧の生活から武士の生活への転化がギリシャの開始ということである。それを媒介したものは海への進出であった。海へ出るということは土地から離れること、従って農牧生活からの脱却である。さらに和辻は、日本の黒潮の海は豊饒な海であるが、地中海は痩せ海であると述べ、地中海を「死の海」「痩せ海」にしたのは、森林の破壊によるものだと述べている。沖縄も今ここ数十年で赤土による海の汚染が問題となっている。圃場整備をした広大な畑が裸地になっている地域や、山を伐り開いた工場現場に、集中的な降雨があるとあつという間に赤土粒子で濁った水が雨水を溜めて沈殿させるコンクリート製の枘からあふれ、すぐに海に流れ込む。

ギリシャは「土地」が豊饒でないがゆえに「土」を捨て「海」に乗り出した。沖縄も小さな海洋国家であり、中国をはじめ東南アジアとの交易を行ってきた海洋民族である。しかし、沖縄においてはギリシャのように「土」を耕すことをあきらめず、「土地」を大事に守り育て続けた。なぜ沖縄が、流亡しやすい「土」を持ちながら「森」を守り、「水」を守り、「土」を守ることができたのか。

## 2 研究目的

本論文は、

- ①和辻哲郎の『風土』、安田喜憲の『森のこころと文明』、オギュスタン・ベルグの『風土の日本』などの風土論、および沖縄の言語学者である外間守善氏や同じく沖縄の民俗学者である仲松弥秀氏、目崎茂和氏の『琉球の風水土』などの著書に依拠し、
- ②ギリシャと沖縄の「土」に着目し、沖縄が古代よりどのような意識をもって自然と向かい合い、「自然」を守ってきたのかを、歴史や神話、伝承を通して考察する。
- ③「土」を通して沖縄の環境保全のあり方を考える。  
ことを研究目的としている。

### 3. ギリシャの土と沖縄の土について

#### (1) ギリシャの土

ギリシャの山肌には石灰岩が露出し、その上にごく薄い、テラロッサに代表される赤い土壌が堆積している。この赤い土壌テラロッサは、本来は厚く、肥沃な土壌であったと考えられている。

この土壌の成因については、2つの説がある。一つは石灰岩が風化して、その中に含まれている酸不溶解成分（不純物）が残り、残積して土壌母材になったとする説と、母材の多くが地中海を挟んで南に広がる広大なサハラ砂漠から飛来した風成塵とする説がある。

図1は、ギリシャ、トルコ、イタリアなどに分布するテラロッサや湖成層などに含まれる微細石英（ $1\text{--}10\mu\text{m}$ ）の酸素同位体比を調べたものである。この同位体比は Inoue ほか（1998）のデータによるものである。

地中海に浮かぶシチリア島のテラロッサに含まれる微細石英の酸素同位体比は 18.1 を示し、イタリア南部のテラロッサの微細石英も 18.3 と 17.9 であった。そしてギリシャ本土でも 18.3～19.3 であった。

このように土壌中の微細石英の酸素同位体比は、地中海の島嶼地域、および地中海北部沿岸域において 17.9～19.3 の範囲に収まることが判明している。しかもサハラから吹く南風の風上にあたる北アフリカのチュニジアのレスも 18.7 と 19.3 の数値を示す。

以上のことから、土壌や湖底堆積層に含まれる微細石英は、サハラ砂漠から北に吹くシロッコ、ギブーブ、ハムシンがサハラから風成塵として運んだもので、湖沼堆積物やテラロッサなどの土壌母材になったことを示している。

サハラから風成塵を北に運ぶ風は、冬季に地中海を西から東に通過する低気圧に向かって南から吹き込む。とくに氷期は地中海に発生する低気圧の通過頻度が高く、南風によってさかんにサハラ風成塵がギリシャに運ばれたと考えられている (Inoue et al., 1998)。

このように、地中海沿岸の例にみられるように、サハラ砂漠は沙漠周辺に風成塵を大量に供給している。このうち氷期には現在の数倍もの風成塵を運んだと考えられている。とくに大西洋に吹く北東貿易風ハルマッタンをはじめ、シチリアやイタリアに吹く乾熱風シロッコが有名で、これらの風が現在でも大量の風成塵を運ぶことで知られている。

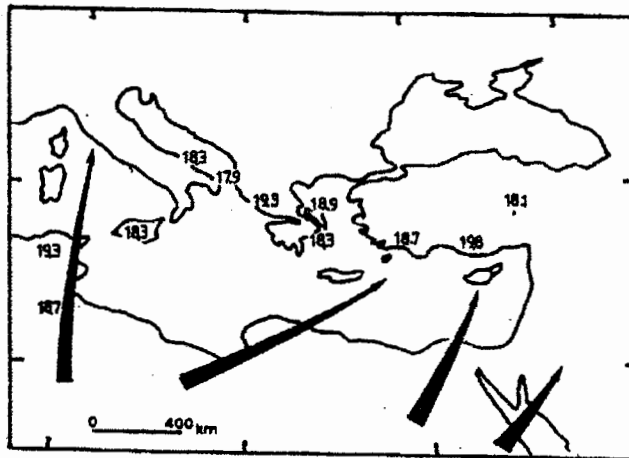


図1 地中海沿岸に分布するテラロッサ、湖成堆積物、古土壌に含まれる微細石英の酸素

同位体比 (‰) Inoue ほか(1998)

## (2) 沖縄の土

### i. ESR 酸素空孔量

琉球石灰岩の上に発達する島尻マージと国頭礫層の上に発達する国頭マージの土壤母材の起源を調べるために、図2に示すように沖縄本島の7箇所(図2)で試料を採取した。

土壤母材の給源を明らかにするために、ESR 酸素空孔量を測定した。それによると、(表1)に示すように、国頭マージの土壤断面のうち、安波7に含まれる粗粒な石英(60 $\mu$ m以上)の酸素空孔量は0.7であった。この石英はその粒度からみて遠距離を風で運ばれた物質ではなく、現地性の流水物質、あるいは近隣から風で運ばれた風成物質である。この低い空孔量0.7は第四紀石英の数値であり、国頭礫層の年代とほぼ一致するところから、この粗粒石英が国頭礫層からもたらされた可能性が高い。

これに対して細粒な石英(20 $\mu$ m以下)は、安波で3.3~7.0、我地で6.6である。このうち、最終氷期にあたるMIS 2とMIS 4に対比される我地と安波3の酸素空孔量は6.6と7.0であった。これは、万座毛の4.3を除いて、島尻マージの酸素空孔量6.6~8.5とほぼ同じである。

島尻マージの基盤となる琉球石灰岩が最終間氷期MIS 5に堆積したものであるから、島尻マージは最終氷期に堆積した土壌とみなされる。したがって島尻マージも国頭マージもともに最終氷期に堆積した土壌層であり、ESR 酸素空孔量もまったく同じ数値である。

さらに安波5では5.7、安波7で4.8、安波9で3.3の測定値を示し、下部の黄色土ほど数値が低くなっている。これは、数値の低い現地性の石英の混入割合が下部ほど多いためであり、それは粒度組成からも支持される。すなわち国頭礫層に近い下位の層準ほど国頭礫層から洗い出された石英の混入率が高く、そのために空孔量が低くなったのであろう。

以上のように、島尻マージと国頭マージの最終氷期に堆積した土壌中の微細石英は、ともに6.6~8.5の範囲におさまり、この数値は黄土高原の数値域に属している(成瀬ほか, 1997)。すなわち、両マージの母材がタクラマカン沙漠やゴビ砂漠といった中国内陸沙漠から偏西風によって運ばれた風成塵起源であることを示唆している(図3)(Toyoda and Naruse, 2002)。

### ii. 粒度組成

琉球石灰岩上に堆積する島尻マージの粒度組成は、60 $\mu$ m~0.244 $\mu$ mに正規分布集団が見られ、そのモードはどの試料も5.5~8 $\mu$ mである。いっぽう、62 $\mu$ m~2mmには正規分布集団は認められないが、辺戸岬だけは粗粒な物質がやや多く含まれている。これは上述したように隣接する標高180mの辺戸御嶽からの流入物質と考えられる。

いっぽう国頭礫層上に堆積する国頭マージも島尻マージと同じように60~0.244 $\mu$ mに正規分布集団が認められる。このほか、試料5~9には62~500 $\mu$ mに正規分布集団が認められるが、1~4には認められない。

国頭マージにおける正規分布集団の存否は、赤黄色土層下部(安波5~9)に粗い物質が含まれること、上部(安波1~4)に粗粒物質がほとんど含まれていないことを意味している。すなわち国頭礫層から洗い出された物質からなる60 $\mu$ mよりも粗粒な物質は下部ほど多く、上部ほど少ない。

このように、島尻マージも国頭マージも共通して5.5~8 $\mu$ mにモードのある正規分布集団を主体とする土壌からなり、島全体が同じ起源の土壤母材からなっている可能性を示唆する。後述するように、この正規分布集団に含まれる微細石英(20 $\mu$ m以下)の酸素空孔量は島尻マージと国頭マージが同じ数値であることを考えあわせてみると、沖縄の土壤母材が風成塵起源であると考えられる。

### iii. 粒度組成と酸素空孔量からみたマージの母材について

(表 1) に示すように、沖縄本島では全域にわたって、島尻マージと国頭マージの両方に含まれる微細石英 ( $20\mu\text{m}$ 以下) の酸素空孔量が同じである。これは微細石英の給源が同じであることを示し、現地性である粗粒石英の酸素空孔量 0.7 を考慮すると、粗粒石英と微細石英の給源が異なることは明らかである。そして微細石英が現地性のものではなく、明らかに外来物質であることを示す。

この微細石英の酸素空孔量の測定値が黄土高原の黄土に含まれる微細石英の数値とほぼ同じであるところから、島尻マージと国頭マージの土壌母材が最終氷期において中国内陸沙漠から飛来したことを推測させる。

沖縄本島の土壌が、沙漠から風によって運ばれた風成塵が主母材であるギリシャの土壌と似通っている。ただギリシャと沖縄の土壌が異なる点は、ギリシャでは現在も風成塵がかなり多く飛来・堆積しているのに対して、沖縄では少なく、そのほとんどが最終氷期に堆積したものである点が相違する。

すなわち、沖縄の土壌母材のほとんどが最終氷期に飛来したものであり、その後に亜熱帯湿潤気候下において赤黄色土が生成されたものであるのに対して、ギリシャやイスラエルの土は、年に 1 mm 程度の速度で堆積するので、植林を実施すれば、短期間に土壌が回復する可能性が高い (成瀬, 1995)。しかし、沖縄の場合は土壌母材の多くが氷期に堆積したものであり、現在のような間氷期には風成塵の飛来・堆積量はきわめて少ない。したがって、沖縄では一度失われた土壌は、次の氷期まで少なくとも約 10 万年もの長い間、待たなければ回復がむずかしい。

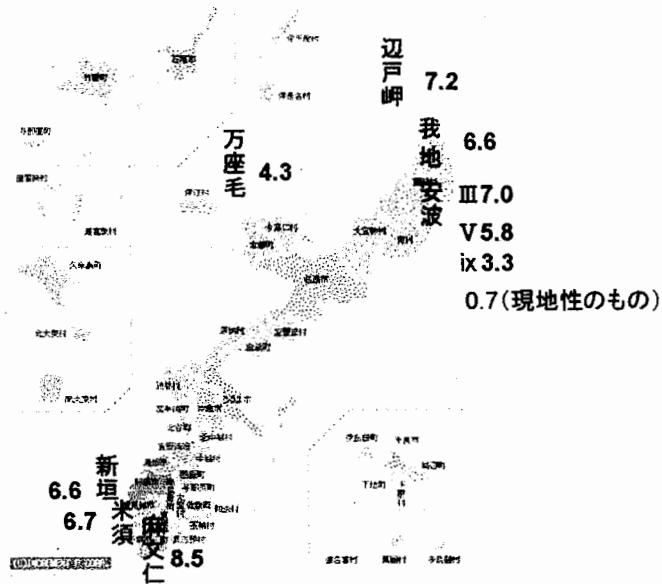


図 2 土壌採取場所

数字は ESR 酸素空孔量を示す (単位  $1.3 \times 10^{15} \text{spin/g}$ )

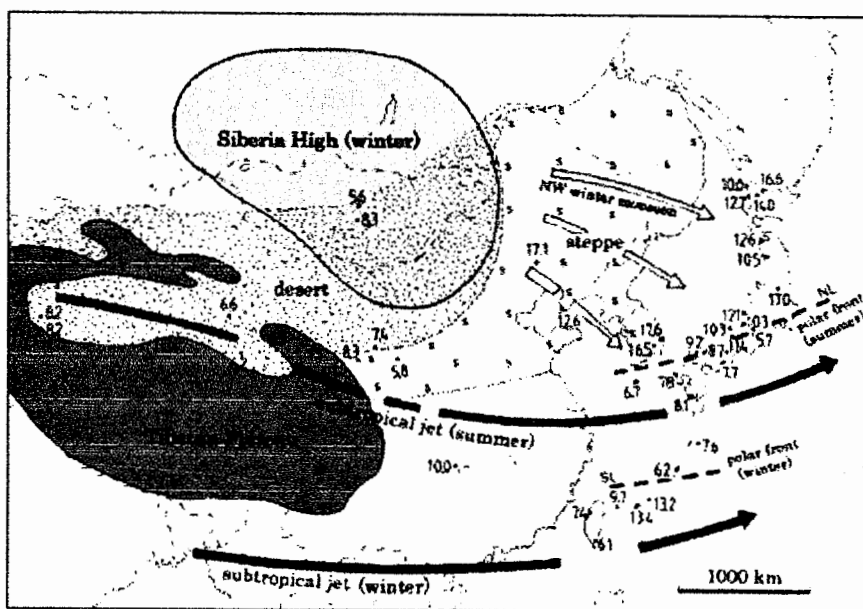


図3 MIS2における古風系

表1 島尻マージと国頭マージに含まれる石英の酸素空孔量

試料 ( $< 20 \mu\text{m}$ )	ESR 信号強度	石英含有率%	酸素空孔量 ( $1.3 \times 10^{18} \text{spin/g}$ )
(島尻マージ)			
新垣	4.2	63.6	6.6
米須	2.07	30.7	6.7
摩文仁	4.19	48.8	8.5
万座毛	1.79	40.9	4.3
辺戸岬	4.53	62.2	7.2
(国頭マージ)			
安波3	6.73	95.5	7.0
安波5	5.77	100	5.8
安波7	4.03	89	4.8
"7 ( $> 60 \mu\text{m}$ )	0.63	84.1	0.7
安波9	0.75	22.1	3.3
我地	5.81	87.9	6.6

#### 4. 冬作農業と五穀豊穡の祭

南島農耕の大きな特色の一つは稲や雑穀類などの夏作物を主作物として栽培する場合、冬作の農耕システムにしたがって農耕が営まれていたということである。なぜ沖縄が冬に播種し、夏に収穫するという冬作のシステムにしたがって営まれるのかということについては、南島の気候的特質、すなわち冬季は湿潤型の特性を示し、夏の多雨は台風の通過に依存しているために変動が大きく、夏作は不安定になる」ことが大きな原因と考えられている。しかも、この冬作システムは雑穀栽培にだけ見出されるものではなく、南島地域においては在来種のイネも伝統的に冬作システムで栽培され、さらにこの冬作型の稲作（オーストロネシア型稲作と名づけられる）は、東南アジアの熱帯島嶼域にも広くみられることが佐々木（2003）によって明らかにされている。

### （1）二つの正月

そのため沖縄では現在でも、この冬作農業を基調とする季節的な循環をとることになり、冬作農業にまつわる五穀豊饒の祭が沖縄では旧暦7月ごろに行われ、旧暦の8・9月には沖縄本島ではトシアメ（年浴）といい、奄美や八重山諸島ではシツ（節）あるいはアランツ（新節）という稲作行事が広く分布している(図4)。

稲や粟などの穀物は現在ではほとんど栽培されていないが、かつては稲作であれば1年周期で播種—田植—生育—収穫という過程が繰り返され、その区切りの年の交代の時期、すなわち夏に新年を迎えることになり、この時期に死と再生をモチーフとする豊饒の儀礼が集中することになる(図5)。基礎をおく本土の農耕と大きく異なる点である(佐々木, 2003)

同じようにギリシャ暦も夏至から始まり、メソポタミア諸国伝統の春分年初をとっていない。沖縄と同じように冬作農業であるギリシャにも次のような農耕にまつわる予祝儀例が残されている。J・Eハリソンによると、アテネでは、二月の終わりに春のさきぶれの祭りともいふべきアンテステーリアと呼ばれる三日間にわたる予祝行事が行われている。第一日目はピトイギア（かめ開き）、第二日目は、コーエス（酒杯乾し）、第三日目はキトロイ（壺）とそれぞれ呼ばれている。これは一言でいえば、日本の盆の行事にあたるもの（ヨーロッパの民俗でいえばオール・ソウルズ・デイ）であるという。

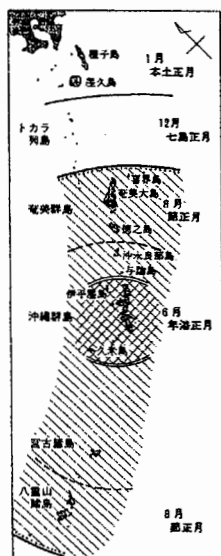


図4 二つの正月の分布図（小野，1982）  
佐々木高明(2003)『南からの日本文化(上)』による。

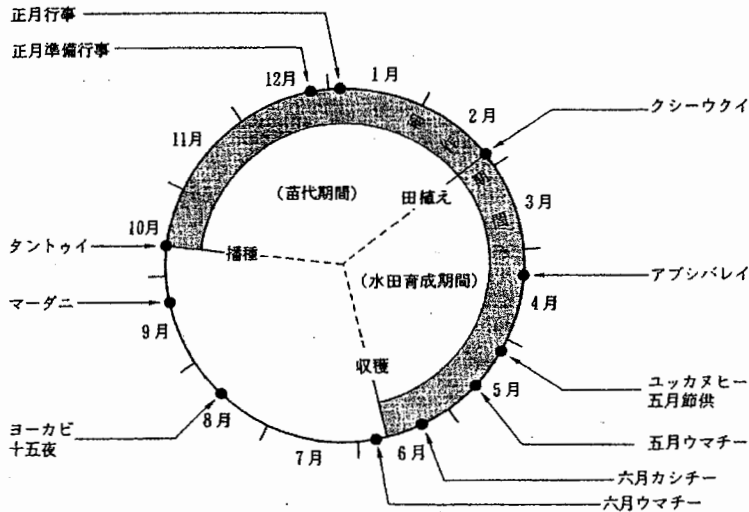


図5 稲作暦と農耕儀礼との対応関係(長沢, 1984)サンゴ礁地域研究グループ編(1992)『熱い自然』古今書院 長沢利明[10. 沖縄の民俗と社会構造]による。

## 5. 古代ギリシャと沖縄の風土観の基層にあるもの

### ～ギリシャ神話と琉球神話における極楽浄土～

高宮広士は「海上の道」(あるいは「新・海上の道」の学説)を検証するため、微細な植物遺体などの検出に有効なフローテーションの技法を、はじめて那覇市那崎原遺跡(弥生～平安並行期後半)と読谷村高地原貝塚(弥生～平安並行期前半あるいは弥生期)の発掘調査で実施した。その結果、沖縄本島においては8～10世紀頃にまで農耕が廻りえることを明らかにした。しかもその農耕が畑作を中心としたものらしいことが作物種遺体によって明らかになっている。

縄文時代以降、さまざまな文化が島伝いに日本本土から南下し、南の島々に定着したことは考古学・歴史学・民俗学の分野でも明らかにされているところであり、すでに縄文時代には沖縄に稲作が伝来していたという可能性がきわめて高い。そして稲作だけが入ってきたのではなく、稲作技術とそれに伴う農具・稲に関する神話・儀礼、あるいは水の管理を基盤とする社会システムなどが複合して入り、それに伴って、人々の精神性にも大きく影響を及ぼしたと考えられている。

農民はいうまでもなく、田畑を耕し作物を収穫する。すなわち農耕によって生活する農民の最大の関心事は五穀豊饒であり、そのためのいろいろな農耕儀礼が彼らの生活の軸となった。つまり農耕自体が人々の死生観そのものの発現であったということになる。しかし、やがてギリシャにおいてこの考えが捨てられ、自然破壊が進み、貴重な土壌が流亡するようになる。古代ギリシャがまだ農耕主体であった時代のアニミズム的死生観や風土観に、私たちはきわめて共感できることが多い。古代ギリシャと琉球、そして日本の人々の心の中には共通した極楽浄土は、海の彼方、あるいは人々が住んでいる土地の地下にあるという点である。琉球列島に暮らす人々には、珊瑚礁で囲まれた美しい海のはるか彼方、あるいは海の深くに、豊饒も禍ももたらす聖なる国があると信じられてきた。この国を沖



縄の人々は、ニライ・カナイと呼ぶ。

今、沖縄の農耕の発祥にまつわる歴史を眺めていると、古代ギリシャと現代の沖縄との間に時代の隔りがあるとはいえ、風土観、死生観の比較を行う上で非常に重要な意味が横たわっているように思われる。

## 6. 沖縄の母系社会

今日の沖縄は、農業人口の老齢化や兼業化も著しく、とても農業が主産業と言える状態ではない。第二次世界大戦が終わった時点で人口の約80%は農民であったが、今日、平和通りで商売をしている人々の大多数は近々この30年位の間に農業をやめて町に出てきた人たちである。沖縄の農耕社会のなかでは、女性が重要な役割を担っていたのかを示す材料が多い。大きく変貌をとげた沖縄の社会にとって女性がいかに大きな存在であったかを示している。沖縄の伝統社会の特徴の一つは、祭と政が有機的・相互補完的關係にあり、しかも性別による役割分業により、祭は女性が、政は男性が主導する点にあるといわれる。

沖縄の伝統的考え方のなかでは「祭」と「政」は少なくとも同様に不可欠であり、その「祭」が女性に委ねられてきた。沖縄では、第二尚氏王統3代目尚真王（1406-1469）の時代に中央集権的支配体制の確立が推し進められ、オナリ神を基盤とする神女たちの組織化が行われた。この組織化を通じて、古代からつづく女性のシャーマニズム的な力を祭祀に利用し、政治が行われるようになったのである。その頃から王＝太陽という太陽信仰も「おもしろうし」の中で歌われてくるようになる。これは古代ギリシャの信仰が、新しく入ってきたインド＝ヨーロッパ民族の太陽信仰にとって代わられる過程と極めて類似するものがある。

たとえばギリシャ神話のなかではギリシャ土着の地母神が新参の神々の妻になり、あるいは娘として登場し、太陽信仰の世界に取り込まれてしまうが、沖縄では女性の持つ力を完全に排除せずに父系社会の中に柔軟に取り入れる形をとった。沖縄本島ではノロ、先島ではツカサなどと呼ばれる女性の神職を中心とした祭祀組織によって祭祀が営まれる。村々を支配する宗教的祭祀をつかさどる神女「ノロ」は按司の姉妹が就くことになり、最高神女である聞得大君が王の姉妹でなければならなかったことなどを考えると、女性の力を利用して、政治的には父系社会への形をとるようになったといえるだろう。女性神職や、女性中心の祭祀組織の存在は、本土の信仰行事の多くが男性の祭祀者や男性を中心とした組織によって行われることと対照的である。

農耕儀礼はそこで生活する人々の精神世界を反映し、男女の位置関係を示す。古代ギリシャでは地母神信仰がキリスト教やインド＝ヨーロッパ人の侵入によって男性優位の構造になっていく。しかし、沖縄では縄文時代的な母系社会が今日まで崩壊するにいたらないほど強く、何世紀にもわたって営々と独自の文化である農耕儀礼が今日まで続けられていることは奇跡的にも映る。そのことが現在まで御嶽が守られ、森が守られ、水や土地が守られてきた理由のひとつではないかと考えている。

ギリシャでは母系社会構造が崩壊し、それがやがて土地利用の変化や土壌の流出となって現出するようになった。ギリシャの人々は、やむなく土がなくなった土地を捨て、海に向かわざるを得なかった。同じことが沖縄でも復帰前後から浮き彫りになってきたのである。沖縄には、現在でも、「をなり（姉妹）」が「あけり（兄弟）」の守り神であるという、琉球弧全体に共通の伝統的な「をなり神」信仰が残っている。姉妹が兄弟の守護神であるという信仰は南東にひろく見られ、兄弟が船旅に出るとき、姉妹は髪の手拭を送って航海の安全を祈った。

ギリシャ・ローマでもキリスト教が起こり、教会が勢力を得るにしたがって大体において女性である魔法使いの迫害は峻烈を極め、16～17世紀にその極に達したという。一方沖縄は、琉球王朝時代（1609年）以後、「国」として、組織的な統治活動を展開し始めた頃で

ある。古代的な社会体制を随所に残したままの特異な封建社会であったというが、その統治上の基本策は農業を中心とした社会の確立であった。

しかし、ギリシャとの違いは、沖縄では、女性である聞得大君などのノロによって国が護られている社会であったということである。祭祀が重要な位置を占める沖縄では、その中心に女性が存在した。それは、沖縄の社会が古代から残る母系社会における女性の持つ力を畏れ、信仰の対象であったからだと思われる。その基層の上に成立したのがギリシャと沖縄の風土観・死生観であった。まだ森が残っていた頃の古代ギリシャの死生観の中には、人間の魂は、あの世とこの世をいったり来たりするという考えがあった。この死生観は農耕を主体とする祭りの中には依然として残っているものが多い。

## 7. 沖縄における非居住区、御嶽、ぐすく

琉球石灰岩地域では地下水が乏しく、井戸を掘るのが困難なため、泉や湧水・地下河川（降り井戸・暗川）の地下水利用が村落立地と深くかかわる。石灰岩堤や段丘崖下は湧水が得やすく、とくにその南・南西側に基盤型をした地割型集落が多いのは、冬の北東風を防ぎ日当たりのよい南面した、計画的な「風水村落」中国の風水説によって建立された村落（目崎，1998）の特徴である。

沖縄では、御嶽や拝所や墓が高い場所に位置しており、非居住区と居住との住み分けが古くからなされ、高い場所が神聖な場所としてあつかわれながらも双方には密な交流があるとされている。

沖縄の古代から続いている伝統的な集落には、複数の御嶽がある。集落のなかでこんもりと木が生い茂っている場所に、一般的にウタキがある。ウタキは「ウガンジュ（御願所）」とも呼ばれ、宮古や八重山諸島では「ウガン」や「オン」「スク」とも呼ばれている。首里王府は、それらの聖地に「御嶽」という総称を与え、その由来や祀られている神名、数などを『琉球国由来記』という文書に記録し残している。そこにはムラを愛護する祖先霊・島立神・島守神・ニライカナイの神・航海守護神などが祀られている。ウタキとは、自然崇拜と祖先崇拜が統合した琉球独自の聖域である。墓所もしくは嶽（自然崇拜の対象物、森林にして中に拝所あり）の樹木を切る勿れ。もし、切れば病気になる。または、家事（津堅島）または暴風（久高島）が起こる、と信じられている。

現在では、御嶽だけを残せばいい、という環境保全が行なわれており、リゾート開発計画を行なう際に、その用地に貴重な拝所をスポットとして丸く囲って残すなど、沖縄の「空間」的な意識や、「土」の特質などを無視した開発が行われている。確かにその拝所は残るが、史跡にせよ多くの御嶽・拝所は点として存在するのではなく、それが意味を持って成立するためには、背後に森（山）の存在や、周辺の地形の配列などが関係してくる。しかし、現在も数多くの拝所がリゾート地や米軍基地の中に点在しており、非居住区と居住区とが分断されるような形になっている。沖縄における環境保全とは「点」で見ていくのではなく「空間」でとらえていくという認識なしには成立し得ないのではないだろうか。

### （1）非居住区と居住区の接点

沖縄には、久米島中里村の沖にある奥武島（おうじま）・那覇港内の奥武（おう）・島尻損玉城村の奥武（おう）・国頭郡屋我地島の奥武（おう）などがあり、それらはほとんど地続きともいえる地先の離れ小島になっている。仲松弥秀（1968）によると現在は人が住むようになっているが、古くは無人の島で、死人を葬る場所であったと述べている。また、奥武には古代墓が存在するということもわかっている。そのような、奥武島の地理的・信仰的特性に着目した仲松は、「奥武」という感じが当てられている「あふ」という語源を「青」とであると説明することによって、沖縄の古代人は後生、あの世のことを「青」といつていた

と解いている（仲松弥秀『神と村』、1968）。

外間(2000)はこれに関連して、「あふ」の意味的な機能を祝詞、神歌などの用例に即して論じている。「おふ」は色彩としての「青」という意味より「聖なる場所」としての慣用的な使われ方が多いとこと、「あふ」は「きく」という語と同義語として使われているとした。

## （2）沖縄における「ヤマ」と「ムイ」

オギュスタン・ベルグ(2003)は、日本の居住である「里」と非居住区としての「山」について次のように述べている。「居住区の里が母性の側に位置し、非居住区の山岳が父性の側にあること。通常的生活は母性のしるしのもとで営まれる。この二極性に対応するのは、日常と非日常の区別である。日本の場合にはこのコントラストがことのほか強い」と指摘している。それは土地の起伏がこれを助長しているとし、「日本という祖先を崇める父系性の社会では、墓地が高いところに置かれていない村はめったにない。こうして父方の祖先と土地の物質的上昇の同化が表現されるのだ。一方こうしてはつきりと離れたところに置かれた死者の霊に保護され、村落の日常が繰り広げられる」と。

しかし、沖縄における山あるいは森の認識は本土と異なる面がある。『おもろそうし』には「やま」と「たけ」が対語で用いられ、ほぼ同義である。琉球では、ヤマ（山）は樹木が繁茂していること、ムイ（森）は起伏があるという特徴がある。つまり、沖縄では、「ヤマ」は地形をあらわす言葉ではなく、樹木が繁茂した非居住区・聖域であり、それが「御嶽」と同意義をもったのだと考えられる。沖縄では本土ほど土地の起伏が激しくなく、本島北部の与那覇岳がおよそ 500 メートルにすぎない。とくに南部は平地が主である。したがって「山」や「森」という言葉は、人が手を入れていない場所、つまり畑地ではない場所というニュアンスで使われる。したがって「嶽」は神の在す聖域をいい、必ずしも高くなくてもよく、クバなどの高い木が繁茂していればよい。

また、沖縄の人々にとって「山」や「森」は、富士山に手を合わせたくなるような「神々しく」、そして怖い父のような存在ではなく、「腰当山」としての愛着のある母のような存在であったことが沖縄の琉歌などにも歌われている。「腰当」とは、母親が子どもを抱きかかえられる様子になぞらえられている言葉であり、母親に囲われるように村が守られていることを表している。日本本土のような山そのものに畏敬の念を感じるというような意識ではなく、もっと生活に密着した御嶽のある神聖な場所としての存在だったと思われる。古代日本でも人々は、人間を自分自身を自然の一部だという意識をもち、人間の住む里と神の住む山や海を畏れ敬ってきた。その神々の国で＝非居住区は「境界」＝山の辺、磯などを通して相互に行き来できる関係であった。人が住んではいけない場所を畏れながらも、行き来できる関係性のなかで、人々は神を畏れ、しかし守られながら生活を営んできたということができる。その関係は、キリスト教やイスラム教のように神を一方向的に畏れ敬う対象垂直的な関係ではなく居住区と非居住区を水平的な関係性であった。

ヤマのように辺境にあり、昼なお暗く混沌とした場所を開発によって簡単に排除するのではなく、沖縄の非居住区と居住区の意識が果たしてきた役割の重要性を忘れ、両者のつながりをも廃棄してしまった後の光景がギリシャに赤茶けた岩肌が沖縄に語りかけているように思えてならない。

## 8. 沖縄の歌謡・民話・文学における風土観

『おもろそうし』とは、琉球方言で表現された、首里王府の編纂した沖縄で最古の歌謡集である。全 22 巻からなり、総数 1.554 首のオモロを納め、かつて沖縄本島の各地およびその周辺離島に伝承された神歌のクエーナやウムイなどを 3 回にわたって採録し、整理し編集した時に『おもろそうし』と呼びかえられた。

(1) おもろそうしの「清ら」について

オギュスタン・ベルグ(2003)によると、人類学者荒木康之は、琉球列島における「島立て」の儀式について解説し、共同体に生きることは、すなわち「清らさ」を維持することであることを言及した。第十・512の歌は、島立てに関する「オモロ」である。

第十・512

一 昔初まりや  
てだこ大主や  
清らや 照りよわれ  
又 せのみ初まりに  
又 てだ一郎子が  
又 てだ八郎子が  
又 おさんしちへ 見居れば  
又 さよこしちへ 見居れば  
又 あまみきよは 寄せわちへ  
又 しねりきよは 寄せわちへ  
又 島 造れて、わちへ  
又 国 造れて、わちへ  
又 こゝらきの島々  
又 こゝらきの国々  
又 島 造るぎやめやも  
又 国 造らぎやめも  
又 てだこ 心切れて  
又 せのみ 心切れて  
又 あまみや衆生 生すな  
又 しねりや修生 生すな  
又 然れば 衆生 生しよわれ

\*てだこ大主とは、太陽神のこと。\*てだ一郎子・てだ八郎子は太陽神の異称。\*あまみきよ・しねりきよとは、沖縄神話上の創世神。

大意；昔、せのみ初まりに、太陽神一郎子、八郎子が、高所から見下ろし、鎮座してみると、島国がなかなか出来上がらない、太陽神が、あまみきよ・しねりきよを呼び寄せたまいて、島を国を作れと云って、島、国を造らせたが、たくさんの島々、国々がなかなか出来ない。島を作り、国を作るまでも、太陽神は待らわびて仰せになるには、あまみや・しねりやの末裔を生むな。さあれば、正しい筋の末裔を生み給え。太陽神は美しく照りたまえり。

オギュスタン・ベルグ(2003)によると、日本では「聖なる石」とされる複雑な形の岩場(磐座)のなかに、庭園の起源をみて取る著作家が多いという。そのような聖なる石が人間空間と自然・神々を繋いでおり、こうした状況がよく見て取れる例は、三段に重なる斑縞岩の塊で構成された複雑な形の岩場を山上に持つ三輪山であるとし、本来日本の庭園は発生期においては、単に石を置き、縄で囲っただけの、神聖な土地の断片という形態に他ならなかったと述べている。

沖縄における御嶽とはまさにこのような場所であり、下記の「おもろ」では御嶽にある「雲子石」(美しく立派な石)に祈りをささげ、聖なる井泉である「あさ川」によって国王が清められた国の最高神女である聞得大君によって国王の長寿と国の平安が祈られる。

沖縄で川（か）とは井泉のことである。清浄でなければならぬ「水」が湧き出して人々の生活を支え、豊饒の源である。また、「あさ川」という表現からわかることは、その井泉を「あさ」つまり尊敬されている父老と表現している。沖縄の人びとにとって、「川」は自分たちの親や祖先であり、命の源であるという認識があったことがわかる。また、うっそうと茂った杜には清らかな井泉がわき出て、その中には神聖な石が存在し、神女を通して神に祈りが捧げられることによって国王や国が守られていることが沖縄の人々にとって「清ら」であったのだろう。

第七卷・346

- 一 聞得大君ぎや  
知念杜ぐすく  
掛けて 栄えよわちへ  
神座 在つる  
雲子石\*1 手摩て  
おぎやか思いに みおやせ  
又 鳴響む精高子が  
知念杜 清らや  
杜ぐすく 添い頂に ちよわちへ  
又 鳴響む按司襲いぎや  
大国杜 清らや  
杜ぐすく 精頂に ちよわちへ  
又 聞得大君ぎや  
あさ川\*2に ちよわちへ  
躰で水は 召しよわちへ  
京のうちに在つる  
百口の手持ちへ  
又 聞へ按司襲いぎや  
あさ川に ちよわちへ  
躰で水\*3は 召しよわちへ  
又 奇せ清らの大のろ  
もちろ内の もちよろ

\*1 雲子石＝美しい立派な石、\*2 あさ川＝知念大川の美称。「あさ」は親、尊敬されている父老。ここは井泉に対する美称で、先祖伝来の井泉の意。\*3 躰で水＝神事の折に使われる浄めの水。

大意；名高く靈力豊かな聞得大君が、知念杜ぐすくに心を掛けてお祈りしたため、ますます栄え給いて。名高く鳴り響く国王様が、知念杜ぐすくの頂上の聖域に来給いて、知念杜、大国杜のなんと立派に美しいことよ。天上の神座にある雲子石にお祈りをし、尚真王様に国の平安を奉れ。聞得大君、国王様が知念大川に来給いて、浄めの聖なる手持ち玉を濯いで、国王の長寿と国の平安を祈り給うことだ。奇せ清らの大のろ神女が、お祈りをします。もちろ内（首里王城または王城内の聖域）がきらめき輝いて、なんと美しいことよ。

仲程昌徳（1982）は『琉球文学の内景』において「『おもろそうし』の歌をあげて、次のように述べている。「沖縄では自然そのすべてが、なんらかの意味で「神」と呼ぶものとしてみられると同時に、清浄でなければならず、しかも豊饒を約束するものとしてみられているはず」と述べているように、『おもろそうし』から「清ら」の例を（11巻まで）調べて

みると、その事例のほとんどが、国王、神女、御嶽であった。その中に御嶽にある石であったり、杜であったり、その中にあるガー（井戸）を清らと歌う歌が数多くあったことから当時から沖縄では、自然を賛美する場合、あるいは五穀豊穡を願うときに「清ら」という言葉を使っていたことがわかる。

## 9. 古代ギリシャと沖縄の「蛇龍」信仰

### (1) 沖縄の蛇信仰とギリシャにおける蛇女神

新城島の来訪神儀礼では、アカマタが洞窟から出現する際に、何度も姿を現してはまた引っ込むという動作を繰り返す、これは村人によって蛇が穴から出る様子を表現すると考えられている（湧上, 1976, 196）。また、竹富島には青蛇（オウジハブ）は祖先神であり、かつ水神であると考えられている（上勢頭, 1976, 300）。

マリア・ギブントス(1989)によると古ヨーロッパの先史人たちは、地上や空や雲の彼方に本源的な水域があり、そうした性格の場所にはどこにでも「鳥女神」や「蛇女神」の霊が漂っていると信じていた。女神の棲家は水面の底深く渦巻く迷宮の彼方にあり、「鳥女神」と「蛇女神」の眼はまさに世界の中心—神秘の水が流れている場所—から睨みをきかせているのだという。古ヨーロッパのあらゆる時代あらゆる地域で、乳児を抱きかかえた蛇人間や鳥人間のテラコッタが作られており、「蛇女神」像は、ふつう平行線やジグザグ、点列といった模様で装飾されている。もっとも頻繁に見られる表現は、蛇を身体にからみつかせたり髪型を「蛇＝渦巻き」風にして蛇の特徴を強調しようとするものだったという。

琉球列島においては、神は頭頂部に寄り付くと考えられている。奄美のノロが頭髮にハブを巻きつけた事例などを踏まえると、頭髮に巻きつけられる蛇とは、女性に寄り付く蛇霊と考えることができる。ギリシャでは、古代には龍信仰が存在し、同時に自然保護への配慮もあった。しかし新参のインド＝ヨーロッパ語族によって龍は退治されるべき対象になった。龍は水をイメージさせる自然を保護するもので、当然、自然破壊、土壌侵食が起こった。

### (2) 沖縄の蛇・龍の民話

縄文時代の日本は母系社会であったといわれる。日本社会の伝統的な多神教の中には、縄文時代以来の平等主義の教えと自然との共存があるとされる（安田, 1996）。しかし弥生時代に入ると人間が蛇を追いかけて、殺そうとする絵が登場する。蛇が神様だった縄文時代が終わり、稲作農耕の弥生時代がはじまると蛇は神の座から転落する。こうした蛇殺しの神話が登場する背景には、縄文時代とは異なった新たな世界観をもった人々が、日本列島にやってきたことを示している（安田, 1996）という。

沖縄の竜宮は、海の底にある。雨乞いをするとき、沖縄では海の彼方にあるといわれるニライ・カナイの神に祈願するオモロが残っている。日本の中世でもしばしば滝で雨乞いが行われたが、そこには龍がいたからであった。古代の大和人が三輪山を水の聖地とみていたように、最近まで日本人は山を大切にしてきた。ところが、日本でも縄文時代には畏怖の対象だった蛇が、弥生時代になると蛇殺しの神話へと変化していく。日本の龍のイメージは蛇が前提となっていたといわれているが、オロチ・大蛇が龍になったといえるほど龍はそれらと密接に結びついているといわれている。

安田(1996)によると、日本では魔女狩りも動物の悪魔化もおこらなかった。その背景には、動物たちと人間との間におだやかな関係が維持されたように、人間と人間の間にも穏やかな関係が維持されたことが深く関わっているという。沖縄には「龍」「蛇」の民話が数多く残されている。沖縄では蛇や龍はどのようにあつかわれているのかというと、沖縄の民話における蛇や龍はきわめて人間的である。ある時は人間が蛇や龍を助け、ある時は助

けられる。この共存の精神は、決して垂直関係の中では存在することはできない。

沖縄は外来の神を取り入れながらも、底流ではもともとあった地下信仰・ニライカナイ信仰・女性神の優位性を保ち続けていく中で蛇はギリシャのメデューサのように悪者化されず生延びてこられたのではないだろうか。実際沖縄では蛇はいきいきとその生活の中で深く関わってきたため自然が守られてきたと考えている。

## 10. 結論

本論では、古代ギリシャと沖縄の自然、農業、宗教観を対比させながら沖縄の「風土観」を考察した。

1) ギリシャも沖縄は温暖湿潤な冬に耕作する冬作農業に依存してきた。農業の基盤をなす土は、ギリシャ・沖縄ともに砂漠から運ばれてきた風成塵を母材としており、石灰岩の上には沖縄は赤黄色土が、ギリシャはテラロッサが堆積している。こうした沙漠起源の風成塵が堆積してきた土壌は柔らかく肥沃ではあるが流失しやすい欠点を有しているので、古来、土壌保全には十分な配慮がなされてきた。

2) 沖縄には「むずくいや天の御物」という言葉があり、農作物の出来・不出来は天の配剤とされる。農業に大切な「土」を守るために様々な工夫が施され、表土を流亡させないために傾斜地では段々畑を作り、地味のない土にはウニなどを海から採ってきては畑に入れるなどの努力が戦前まで行なわれた。

3) 沖縄農業の特色の一つは冬作農耕システムが営まれていたことである。冬に播種し、夏に収穫するもので、二つの正月もその例である。同じく冬作農業の下でできたギリシャ暦も夏至から始まり、メソポタミア諸国伝統の春分年初をとっていない。

4) ギリシャの農耕儀礼は「死霊の消去と植物の発育の祭りであり、人間と自然の偉大な再生の循環の祝祭」というように、農耕労働自体が儀礼であった。つまり農耕自体が人々の死生観そのものの発現であった。しかし、ギリシャではこの思想が捨てられ、やがて天国-現世という垂直思考の下で自然破壊が進み、貴重な土壌が流亡するようになる。沖縄の死生観も農耕儀礼と深く関わっており、縄文時代以降、ニライカナイに代表される地下あるいは海上にあの世をみる水平的、横社会の死生観が維持され、自然を保存する哲学が守られてきた。その一端は自然を巧みに描写する「おもしろうし」の歌にみることができる。

5) 古代ギリシャでは母系社会が新参の宗教によって男性優位の構造に変えられたのに対し、沖縄では縄文的な母系社会が今日まで継続した。古代ギリシャでは居住区と非居住区の区別がなかったが、沖縄では上流の非居住区にあるヤマに御嶽、拝所、墓地在り、昼なお暗く混沌とした場所を形成し、居住区は人々の生活の場であった。そして両区の住み分けが古くからなされ、神聖な所として扱われながらも双方に密な交流があった。地母信仰を捨てたギリシャでは、非居住区と居住区をつなぐを廃棄した結果、生じた岩だらけの荒野が、居住区と非居住区、俗と聖、内と外、中心と終焉、秩序と混沌といった両義的意味の重要性を端的に語っている。沖縄では神々は非居住域から居住域へ、「森」から「里」へと移り変わる、つまり非居住区の重要性を正しく認識したことによって森が守られ、水や土地が守られてきたといえよう。

6) ギリシャは上記の理由から「土地」が豊饒でなくなったがゆえに「土」を捨て「海」に乗り出した。沖縄も小さな海洋国家であるが、ギリシャのように耕すことをあきらめず、「土地」を大事に守り続けた。ヤマのように辺境にあり、昼なお暗い場所を開発という名の下に簡単に排除するのではなく、非居住区と居住区が果たしてきた役割の重要性を考え直す必要をギリシャの荒野が私たちに語りかけているのではないだろうか。

7) インド=ヨーロッパ族の侵攻によって男神がギリシャの地母神にとって代わったこと

が森林破壊の予兆であったことを考えると、樹木が生い茂るヤマが守られてきた沖縄では、非居住区と居住区の境界に住むノロが境界神ヘルマの役割を果たしてきたといえよう。ギリシャでは龍や蛇は退治されるべき悪者であったが、沖縄では龍や蛇にまつわる民話や伝承が自然に対する畏敬の念と自然保護の大切さを表している。

8) 古代ギリシャにおいても土を守る工夫がなされていたが、やがて放棄され、人々は海を目指すようになった。温かな気候と「従順な土地」に恵まれた古代ギリシャの土地と、温暖ではあるが天候に支配され易く、「雑草」との戦いに明け暮れなければならなかった沖縄の土地と、この二つの風土の違いがもたらす「土」に対する意識を比較することによって、今後の沖縄の環境保全の行方を模索することができると考えられる。

### 参考文献

1. ベイジル・ホール著、春名 徹訳 (1986) 『朝鮮・琉球航海記—1816年、アマースト使節団とともに—』岩波文庫、385 p.
2. 和辻哲郎著 (1979) 『風土—人間的考察—』岩波文庫、299 p.
3. オギュスタン・ベルグ著、篠田勝英訳 (2003) 『風土の日本 自然と文化の通態』ちくま学文庫、428 p.
4. 安田喜憲著 (1996) 『森のこころと文明』NHK 出版、271p.
5. 目崎茂和・木崎甲子郎編著 (1984) 『琉球の風水土』築地書館、246p.
6. Rapp, A. and Nihlen, T. (1986) Dust storms and eolian deposit North Africa and the South Europe. *Catena Supplement*, 20, 43-55.
7. Inoue, K., Saito, M. and Naruse, T. (1998) Physicochemical, mineralogical, and geochemical characteristics of lacustrine sediments of the Konya Basin, Turkey, and their significance in relation to climatic change. *Geomorphology*, 23, 229-243.
8. 永塚鎮男 (1984) 赤黄色土および類縁土壌. ペドロジスト, 28, 153-164.
9. 鴨下 寛・横井時次・兼松四郎 (1933) 沖縄県土性調査報告. 第1編, 1-23.
10. 川島禄郎 (1937) 沖縄島の土壌生成型式に就いて (第1報), 日本土壌肥科学雑誌, 11, 143-154.
11. 平野 俊 (1938) 沖縄の土壌型に就て. 日本土壌肥科学雑誌, 12, 577-586.
12. 松坂泰明・山田 裕・浜崎忠雄 (1971) 沖縄本島・久米島の土壌の分類について. 農業技術研究所報告, B-22, 305-404.
13. 浜崎忠雄 (1979) 西南諸島の母材と土壌. ペドロジスト, 23, 43-57.
14. 山田 裕・木村 悟・松坂泰明・加藤好武 (1973) 石垣島・宮古島および与那国島の農耕地の土壌調査と分類. 農業技術研究所報告, B-24, 265-65.
15. 渡久山章 (1984) 石灰岩の島. 木崎甲子郎・目崎茂和編著『琉球の風水土』築地書館, 88-100.
16. Jackson, M.L., Levelt, T.W.M., Syers, J.K., Rex, R.W., Clayton, R.N., Sherman, G.D. and Uehara, G. (1971) Geomorphological relationships of tropospherically derived quartz in the soils of the Hawaiian Islands. *Soil Science of America Proceedings*, 35, 515-525.
17. 成瀬敏郎・井上克弘 (1982) 北九州および与那国島のレスー後期更新世の風成塵の意義一. 地学雑誌, 91, 164-180.
18. 河名俊男 (1988) 『琉球列島の地形』新星図書出版, 127p.
19. 町田洋・新井房夫著 (2003) 『新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺』東大出版会, 336p.
20. 成瀬敏郎・小野有五・平川一臣・岡下松生・池谷元伺 (1997) 電子スピン共鳴 (ESR) による東アジアの風成塵石英の産地同定. 地理学評論, 70A-1, 15-27.
21. Toyoda, S. and Naruse, T. (2002) Eolian dust from the Asian deserts to the Japanese Islands since the



- last glacial maximum: the basis for the ESR method. 地形, 23, 795-810.
22. 佐々木高明著 (2003) 『南からの日本文化 (上)』NHK ブックス, 282p.
  23. マリア・ギブintas著・鶴岡真弓訳・松井健編 (1989) 『古ヨーロッパの神々』言叢社, 313p.
  24. 沖縄県第四紀調査団・沖縄地学会 (1975) 『沖縄の自然』平凡社, 232p.
  25. 外間守善校注 (2000) 『おもろそし上』岩波文庫, 501p.
  26. 仲程昌徳著 (1982) 『琉球文学の内景』タイムス社, 306p.
  27. 荒川紘著 (2004) 『龍の起源』紀伊国屋書店, 296p.
  28. 沖教組沖縄むかし話編集委員会編 (1979) : 『沖縄のむかし話』(株) 日本標準, 256p.

## A study of climate from the view point of soils in Okinaw and Greek

AKAMINE KAZUE

Key Words : Okinawa, Greek, matrilineal society, winter time agriculture, Ökumene, Anökumene,  
aeolian dust, faith of snake and dragon